The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Jain Vishva Bharati University を訪ねて
Author(s)	八木, 綾子
Citation	印度民俗研究. 2014, 13, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Jain Vishva Bharati University を訪ねて

八木　綾子

1 はじめに

本稿は、筆者が 2012 年 1 月 25 日から 3 月 28 日の間に「京都エラスムス計画」の国際研究機関派遣の助成を受けて、インド北西部のラージャスターン州のラードゥヌーン (Lāḍnūn) という町に滞在した際に出会った Jain Vishva Bharati 大学のサードゥヴィー (sādhvī) とサマニー (samanī) の報告である。渡印の主な目的は、この町を拠点とするジャイナ教白衣派の一派である、テーラパント派 (Terapanthī) の女性出家者の実生活を見ることであった。この報告は YAGI=HOHARA (2013) で行った。だが帰国後に、ラードゥヌーンのテーラパント派について、文化人類学的な見地から著された Vallely (2002) の著書があることを知り、そこで本稿では、先行研究の現地報告と Vallely の著書で取り上げられていることに触れながら、自身の現地調査でえられた新たな内容をくわえ、調査の結果を提示してみたい。なお、筆者はこれまで、白衣派のジャイナ聖典を文献学的に研究してきたものであり、社会学や人類学の専門的な調査とその方法については無知である。そして、現地では英語でやりとりをしたため、インフォーマントの本来の意図を正しく理解していない可能性もある。ラージャスターン州の現地語のマールワーリーでなくとも、せめてヒンディー語で意思疎通を図る必要性をいまさらながらに痛感している。なお、筆者の質問に答えてくれたのは主に、英語に堪能なサマニーのチャイトゥヤ・プラジュニャ・ジー (Caitya Prajñajī) と、出家を志望する女学生のリーダーであったプリーティ (Prīti) で、お二人のご厚意にこの場を借りて感謝申し上げる。

2 ラードゥヌーンのテーラパント派

2.1 ジャイナ教について

まず、ジャイナ教について簡潔に述べておきたい。紀元前 5 世紀頃、東インドで成立したジャイナ教は、紀元頃に白衣派と空衣派に分裂し、変遷を経つつ現在までインド国内で存続している。白衣派は女性出家者を認め、聖典を伝持し、出家者は白衣を着用する。空衣派は女性出家者を認めず、白衣派の伝持する聖典の権威を認めず、修行を積んだ男性出家者は裸形をとることもあり、裸形派とも呼ばれる。

白衣派は、一般的に 45 部の聖典を伝承しているが、派により聖典と認めている部数は異なる。10 部からなるアンガと称される聖典群

では、教義や業論、解脱論、宇宙論等の様々が説かれる。そして、根本経典に分類される聖典は、初学者を対象としていて分かりやすく説かれている。中には、パーリ仏典との平行句もみられ、同じ用語が用いられることもある。また、説話を収めた聖典もある。これらの聖典は、中期インド語で著されているが、現在は、英訳やヒンディー語注のついた刊本も利用することができる。聖典は、主にジャイナ僧たちによって校訂され、出版されてきた。テーラパント派も、聖典本文の校訂やヒンディー語訳注や、英訳等を作成し出版を行っている。

2.2 テーラパント派について

白衣派の一派であるテーラパント派は、尊像崇拝を認めず、出家者が滞在する施設を教団が保持することを認めず、教団を一人のアーチャーリヤ (Āchārya) が率いる独自性の強い派といえる。白衣派には、偶像崇拝を認めて偶像を設置するための寺院を持つマンディルマールギー (Mandirmārgī) 多数派と、偶像崇拝を認めず寺院を持たないが、遊行する出家者のための滞在所を所有するスターナクヴァーシン (Sthānakvāsin) 少数派がある。テーラパント派は、出家者のための滞在所を所有することも、出家者の守るべき無所有戒に抵触すると主張して、後者から 18 世紀後半に分派した。そして、男性と女性の出家者集団を、強い決定権を持つ一人の男性のアーチャーリヤが率いる。アーチャーリヤが存命中に次のアーチャーリヤになるユヴァーチャーリヤ (Yuvāchārya) を指名する。2010 年に 10 代目のアーチャーリヤであったマハープラッギャ (Mahāprajña) 師が亡くなり、現在は 11 代目のマハーシュラマン (Mahāśraman) 師である。後述する通り、教団の制度上の改革や聖典の編集出版も精力的に行ってカリスマ性のあった 9 代目のトゥルシー (Tulsī) 師と、その後継者でありプレークシャーという瞑想法を考案し広めたマハープラッギャ師に比べると、今は 50 代の若いアーチャーリヤである。報告者の滞在当時には、ユヴァーチャーリヤはまだ指名されていなかった。

ラードゥヌーンのテーラパント派について日本では、すでにいくつかの報告がなされている。橋本 (1990), 長崎 (1995), 堀田 (2007) は現地報告であり、田中 (2001) はこの派の行った宗教的社会運動であるアヌヴラト運動を紹介するとともに、テーラパント派の讃歌を楽譜におこしている。そして、坂本 (1999) はこの派で新しく考案され実践され

ているプレークシャーという瞑想法に言及している。海外における報告については、Vallely (2002) の文献表を参照されたい。これらの内容とも重なるが、さらにテーラパント派について紹介する。

2.3 ラードゥヌーンについて

ラードゥヌーンは、首都デリーから直通の夜行列車で 7 時間ほどのタール砂漠に囲まれたラージャスターン州の小さな町である。現地語はマールワーリーであり、報告者の訪れた 1 月から 2 月は乾季で、朝晩は冷えこみジャンパー等の上着が必要だった。3 月下旬になると、20 度を超える暑い日も増えてきた。近隣には、小さな村々があり、ジャイプールのような都市と比べると小さな町であるが、電車の駅や市場、銀行、長距離バスの停留所もあり、地方の中規模の町であった。町には、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒もいるし、出稼ぎのネパール人も少なくない。町中を歩いていると、「ネパール人だ」としばしば言われた。学内でも、ネパール人はよく働くので重宝されていて、約 2 か月間ゲストハウスでの食事を作ってくれたのもネパール人の料理人であった。彼は、構内に居室をあてがわれていて、ノートパソコン以外の電気製品（テレビ、ホットサンドメーカー、デジカメ等）の多くを所有していて、園丁や掃除夫のインド人達よりも多く稼いでいるようであった。

この町はトゥルシー師の誕生地であり、ここにジャイナ教研究のための研究所と、ジャイナ教の教育を行う機関が設立され、それが大学に昇格して Jain Vishva Bharati University（= JVBU）となった。出家を志望する女性のための寄宿寮もある。JVBU に通っている学生は、ラージャスターンやグジャラートを始めに、隣接する州のジャイナ教徒の家庭の人が多い。社会学部のある女学生は、自分たちはこの町でミドルクラスであり、アッパークラスはジャイプールのような都市に買い物に出かけもするが、自分達は全てこの町ですますと言っていた。彼女達からは、しばしば日本人の既婚者と未婚者はどのようにして見分けるのかと尋ねられたものである。女学生たちの場合、既婚者の女性が額につける赤いビンドゥから判別すると、既婚者と未婚者が半々くらいな割合でいた。

受け入れ教官となって下さったジャガット・ラーム・バッタチャリヤ (Jagat Rām Bhattacharyya) 先生によると、この大学を卒業しても

ほとんどの学生は就職先がなく、優秀な学生の中には別の学校に入り直す人もいるそうである。就職に苦戦しているのはどの国でも同じであった。

3 テーラパント派の独自性

3.1 トゥルシー師による改革

現在のテーラパント派の独自性はトゥルシー師による改革に負うところが大きいので、他派と比較しつつそれらを紹介していきたい。21 歳でアーチャーリヤとなった彼は、1949 年にアヌヴラト運動という宗教的社会運動を始めた。端的に言えば、テーラパント派に対象を限らずに人種や宗派に関わりなく、出家者と在家者ともに、人としてより良く生きることを目指した運動といえよう。当時は、インド国外でも関心を持たれたようである [田中 2001:126–133]。

ジャイナ教の出家者は、雨期を除いて徒歩で遊行するのが原則である。しかし、高齢や病気のために托鉢遊行を続けることができなくなった出家者（男性サードゥ sādhu, 女性サードゥヴィー sādhvī）のために、トゥルシー師は滞在施設を作らせた。そこで、高齢や病気の出家者は一年を通して過ごしている。そしてアーチャーリヤに指示されたサードゥとサードゥヴィーのそれぞれ一グループがそこに一年交代で滞在して、補助と介護にあたっている。女性出家者サードゥヴィーのための滞在施設の一つは、大学から歩いて 15 分ほどの、ラードゥヌーンの町中のトゥルシー師の生家の近くにある。他派の場合、高齢のため歩行が困難になった出家者であっても、誰かに背負ってもらうなどして遊行を続け、一所に留まることはしないそうである。

このように、出家者たちは雨期以外は遊行を続けるが、出家者の守るべき誓戒のうちの不殺生戒に抵触するために、乗り物に乗ることは認められない。従って、行動は自ずと制限され、インド国外に行くこともない。そこでトゥルシー師は、乗り物に乗ることを認めない出家者（サードゥ, サードゥヴィー）とは別に、布教等の理由でアーチャーリヤが許可した場合には乗り物に乗ることが可能で、自分のために用意された食事 (理想的な施食は、出家者のために予め用意されたのではないものとされる) を受け取ることができる、サマン (saman) とサマニー (samanī) という出家者の区分を設立した。男性のサマンの数は少ないが、女性のサマニーは 100 人程度いて、海外にも派遣されて

いる。サマン・サマニーはそれぞれ、サマン・サマニーになるための出家儀礼をアーチャーリヤのもとで受けている。ラードゥヌーンに滞在しているサマニーは、JBVU 構内のゴータマと呼ばれる 3 階建ての建物に居住している。その他に、大学を離れて遊行しているサマニーもいる。建物の収容人数を考慮しても、学内に留まれるのは 30 人程度と考えられる。ラードゥヌーンに留まっているサマニーは、学生かあるいは教員としてなんらかの形で大学に関わっている。女性の出家志望者であるムムクシュ (mumukṣu) のうち、いつ、誰がサマニーになり、あるいはサードゥヴィーになるかは、個人の適性を考慮してアーチャーリヤが決定する。

ジャイナ教では一般に、電気を必要とする機器の使用も、不殺生戒に抵触するために、出家者はそれを避ける。しかし、トゥルシー師は、より多くの人が説教を聞くことを可能にするためにマイクを使用した [Vallely 2002:110]。実際に筆者の滞在中にも、広いホールで行う行事等の際に、サマニーやサードゥヴィーはマイクを使用していた。だがマイク以外の電気一般に関しては、テーラパント派のサードゥとサードゥヴィーは、原則として電気を直接的に使用しない。そもそもサードゥヴィーの滞在施設であるセーヴァケーンドラと呼ばれる建物には、電気が引かれていない。だが大学構内にある、サードゥの滞在所となっている建物には、電気は引かれていて、夜は電灯をつけるし、天井には扇風機が設置されている。ただし、使用する目的は、夜のお祈りに参加する在家者のためであり、出家者自身が電源を入れたり切ったりはしない。

サマニー達に対する電気の使用規制は、サードゥやサードゥヴィーよりも緩やかである。サマニー達の滞在所にも、電灯と扇風機は設置されている。それでも、彼女たち自身が直接電源を入れたり、切ることはしない。夜のお祈りであれば、通ってくる掃除夫か、お祈りに参加する在家者がホールの電灯をつける。また、お祈りの後で、各自に割り当てられた部屋に戻ると掃除夫を呼んで、部屋の明かりをつけてもらって、聖典の学習などを行っている。また、大学のコンピューター室のコンピューターや、大学から貸し出されるノートパソコンも使用する。だがコンピューターの電源は、コンピューター室の技術員や他の在家の学生が触る。割り当てられた各部屋でノートパソコンを

使用する時は、在家者や掃除夫に、プラグを挿してもらっている。しかし、大学構内の滞在所に留まっているサードゥたちや滞在施設にいるサードゥヴィーたちが、大学の図書館は利用しても、授業に参加せず、コンピューター室のコンピューターも使用しないのと比べれば、サマニー達はかなり電気製品を使用しているといえる。

周知の通りインドでも、携帯電話は広く普及していて、学生のほとんどが所持している。サマニーは、必要があればサマニーのリーダーの許可を得て、携帯電話を使うこともできる。サードゥやサードゥヴィーは使用しないが、出家者のグループに出家儀式を受ける前のムムクシュがいれば彼や、グループに随行する在家者たちが出家者に代わって携帯電話を使って情報の伝達をする。

海外に布教にいったり、インド国内の研究会や学会で発表する機会をもつサマニーにとっては、情報を収集したり、原稿を作成したりするためにもコンピューターの使用は必要であろう。論文や本を PDF 化したものもよく使用していた。必要のある電気製品を最低限使用はするが、彼女たち自身が電源を入れることは避けており、そのあたりに出家儀礼をうけた出家者と在家者の違いが感じられた。

以上が改革を経た教団のおおまかなあらましであるが、さらに個人的に経験した事例のいくつかを挙げて出家者の様子を紹介したい。

3.2 現在の出家者たち

・ジャイナ僧との聖典についてのやりとりから

筆者がラードゥヌーンに着いた時には、英語が堪能で英訳書の著書も多いムニ・マヘーンドラクマール (Muni Mahendrakumār) 師のグループが滞在していた。聖典のうち、第一のアンガである *Āyāraṅga* の一詩節について意見を求めると、同派の刊行したテキストや、ジャンブーヴィジャヤ (Jambūvijaya) 師の編集した注釈つきのテキストを参照しつつ、最終的には、トゥルシー師はこう述べているというように、トゥルシー師が編纂したテキストについているヒンディー語訳や注を説明してくれた。また、第二アンガの *Sūyagaḍāṅga* の英訳の出版の準備中で、第二稿の校正もしておられた。もちろん、パソコンは使用せず、プリントアウトされた原稿に朱で訂正を入れられる。

高名なムニ・マヘーンドラクマール師のグループに対しては、移動のサポートをする人の数も、夜の礼拝の後に訪ねてくる在家者の数も

多かった。出家者としての地位が高くなるに比例して、在家者と関わる時間も増えるということがみてとれた [Vallely 2002:155]。

なお、テーラパント派では、聖典を暗記することができるのは、出家儀礼を受けたものに限られる。ムムクシュや在家者は、聖典を読み意味を学ぶことはできるが、暗記はできないそうである。聖典の中では、まず、根本経典の一つである *Dasaveyāliya* を学習し、ついで *Uttarajjhāyā* に進み、以後は、個人の関心に応じて学習していく。*Dasaveyāliya* には節もつけられていた。

・瞑想について

ブッダが瞑想 (dhyāna) を重視し実践していたことは、パーリ仏典等の記述から明らかである。そして、ジャイナ教を仏教と比較する時には、ジャイナ教は苦行重視の立場であり、仏教は精神的な修養を説くという見方もある。ジャイナ教も、古くは瞑想を行っていたが、その方法は伝承されていない。そこで、テーラパント派の 10 代目のアーチャーリヤであるマハープラッギャ師により、プレークシャーという瞑想法が考案され実践されている。実践法について多くの本が出版されていて、瞑想を行うための施設も学内にある。そして、瞑想を行うキャンプを一般にも公開して定期的に行っている。これには、世界中から参加者があり、筆者も滞在中に、メキシコからの参加者に出会った。この瞑想法は、日本では、沖ヨーガをしている人々の間では知られていて、定期的に参加しているようである [坂本 1999]。

数人のサマニー達にジャイナ教は精神的な修養を重視するのかと尋ねると、みなそうだと答えた。精神的修養は難しいし、現在のアーチャーリヤは機会あるごとに、精神的な修養を説いているそうである。筆者には、様々な制約のある食事や、種々の制限のあるジャイナ教の出家者の生活スタイル自体が、一種の苦行のように思われたが、それは彼女たちにとっては「制約」ではないという。

・サマニー達

約二か月間 JVBU に滞在した間、同年代のチャイトゥヤ・プラジュニャ・ジーとともにテキストを読んだこともあり、サマニー達の日常を身近でみることができた。夜のお祈りの後の自由時間にサマニー達の滞在所を訪れることが多かった。サマニーたちは、一日の時間割り

通りに日課を行い、その他にローテーションで行う仕事などをこなしている。さらに、水だけ飲む、特定のものだけ摂取する等の種々の断食を個人的に行う。夜の礼拝の終わった後で、ある部屋から歌声が聞こえてきたことがあった。なぜ歌を歌っているかを尋ねたところ、一人のサマニーが３日間の断食をし終えて、それを祝って歌っているということであった。ラードゥヌーンの町にも、偶像崇拝派の裸形派の寺院があり、内部は彩色豊かである。しかし、偶像崇拝を行わず、寺院をもたず、花を捧げるような儀式も行わないテーラパント派の出家者の日常生活では色が限られているせいか、朝晩のお祈りで歌う出家者たちの歌声は、美しい彩りを添えるかのように聞こえ、強く印象に残った。質素なくらしの中でもサマニー達は陽気で、ある時には、マールワーリー話者ではない掃除夫のルクムさんが、サマニーの言ったマールワーリー語の意味がわからずにいるのを見て、くったくなく笑い出す明るい人たちでもあった。

ラードゥヌーンでは、遊行中のサードゥヴィーとサマニーには会えないが、滞在中の両者と女性の出家志望者の三者に同時に会うことが可能であり、比較することができる。遊行する１グループは４人から６人程度の少人数からなっているが、JVBU に留まっているサマニー達は、出家儀礼を受けてからの経た年数もまちまちで、20 歳前後から 60 代の人までの 30 人程度で集団生活を続けている。女性出家者にはサマニーとサードゥヴィーという二つの範疇があるが、出家のための準備をしている女性のムムクシュに尋ねると、みなサードゥヴィーになりたいと言っていた。遊行して過ごすという生活スタイルに憧れを持つようで、アーチャーリヤがサードゥヴィーになるよう言ってくれることを毎日祈っていると言う人もいた。出家者としての地位はサードゥヴィーがサマニーよりも上である。

サードゥヴィーもサマニーも、男性出家者とは異なり単独で行動することは認められず、建物の外に出るにはリーダーの許可が必要であり、二人で行動しなければならない。そのために、自由に過ごすことができる時間は限られているが、JVBU に留まっているサマニーには比較的時間の都合をつけることができるらしく [Vallely 2002:168]、研究や学習をする時間が確保できそうであった。例えば、午後の自由時間帯に行われた、サーガルマル・ジャイン氏の講演を聞くこともでき

る。サマニーの中には博士号を取得している人もいれば、クスン・プラジュニャ・ジー (Kusun Prajñajī) のようにテキストの校訂を行った人もいる。サードゥやサードゥヴィーの守るべき規定と比べると、インターネットやパソコンの使用が認められ、許可を得れば学外にでて乗り物に乗ることもできるサマニーたちには、そのような状態を学習・研究・教育の面で有効に活用することが期待されるのであろう。

大学院生であり、出家儀礼を受けてから 6、7 年の若手のサマニーは、現在の生活は贅沢になってきているが、そのような環境の中でも、ジャイナ教の教えは十分に通用すると思うと言う。また、大学での学業を終えた時に、どのサマニーが大学に教師等として留まり、どのサマニーが遊行にでるかは、本人たちの希望によるものではなく、アーチャーリヤが決めることで、自分達はその決定に従うのみであると言っていた。

少なくともテーラパント派では、人種や国籍を問わず誰でも出家することは可能である。しかし、今までもそうであったように、主としてインドでジャイナ教徒の家庭に生まれ育った人たちが、出家者としてあるいは在家者としてそれぞれの宗教的役割を果たしながら生活して、次世代につないでいくことが、もっとも自然な形態であり、宗教上の結束を強めるうえで重要であると、筆者には感じられた。

４残された調査項目について

今回の調査では確認できなかったが、以下の点は今後の調査課題として残った。Vallely (2002) を参照しつつ筆者なりに気付いた事柄を挙げて結びにかえたい。

・新テーラパント派の消息

出家者のマイクの使用を認めることや、サマン・サマニーという範疇の創設等のトゥルシー師の行った改革や、在家者との関わり方をめぐる意見の違いが、テーラパント派の出家者と在家者の間にもみられた。そして、改革に反対するサードゥとサードゥヴィーは、1981 年に離脱して新テーラパント派 (Naya Terapanthī) と称した [Vallely 2002:149ff]。Vallely がラードゥヌーンに滞在した 1996 年当時、デリーには新テーラパント派がいたことが報告されている [Vallely 2002:152]。その後の彼らと、彼らを支持する在家信者の消息についての報告はなされていない。筆者は離脱したグループがいたことを、帰国後に知ったため、

滞在中に彼らについて話を聞くことはできなかった。

・サマニーのための滞在施設について

サードゥヴィーとサマニーは、それぞれ異なる出家儀式を受けて出家したものである。また、サードゥヴィーは箒を携帯し、サマニーは建物の外へ出る時には、カバチャという上着を着用するといった持ち物と服装についての規定も異なっている。朝晩のお祈りや、持ち物の点検、托鉢をする等、一日の過ごし方は基本的に類似しているが、特別な日を除いて、朝晩のお祈りやミーティングは、サードゥヴィーはサードゥヴィーのみで行い、サマニーはサマニーのみで行う。サードゥヴィーとサマニーという異なる範疇の女性出家者が、一緒になにかをする機会は少ないということである。

現在、ラードゥヌーンにサードゥヴィーのための滞在施設はあるが、サマニーのためのそれはない。しかし、６０代のサマニーもいて、高齢になったサマニーへの対処の仕方は近い将来問題となると思われる。老齢等で大学で教えることができなくなったり、遊行できなくなったサマニーの処遇が問題となろう。また、学外にでて遊行しているサマニーの生活については、Vallely (2002) でも報告されていないため、どのように遊行しているのかを確認する必要があるだろう。

参考文献

坂本知忠『ジャイナ教の瞑想法：６つの知覚瞑想法の理論と実践：プレークシャー・ディヤーナ』ノンブル. 1999.

田中かの子「アヒンサーからの創造 —現代インドにおけるジャイナ教白衣派テーラーパントの精神文化 —」『文化』第 20 号. 駒沢大学文学部 文化教室. 2001. 125–187.

長崎法潤「ジャイナ教テーラパンタ派を訪ねて」『ジャイナ教研究』第 1 号. 1995. 64–81.

橋本篤司「ジェイン・ヴィシュヴァ・バラティ テーラーパンタ派ジャイナ教研究所」『仏教学セミナー』第 51 号. 大谷大学. 1990. 96–101.

堀田和義「砂漠の中心で不殺生を叫ぶ聖者たち— ラードゥヌーン見聞録 —」『仏教文化』46 (2007), 81–110.

Vallely, Anne *Guardians of the Transcendent, An Ethnography of a Jain Ascetic Community.* University of Toronto Press. 2002.

Yagi-Hohara, Ayako “A Sketch of the Life of Terāpanthi Nuns: A Jain Śvetāmbara Sect in Lāḍnūn”, *Journal of Jaina Studies*, Vol. 19, 2013. 69–80.